私のＨＰ（ブログ）への学生の感想

Ａ

　一見難しそうに思えますが全部読みやすくて、興味引かれるものばかりでした。特に『新型コロナ危機の後の教育』、『偶然ということ』、『片思いについて』、『私はなぜ教育の道を志したか』は、自分に通ずるもの、気になることでした。

『夕方の稲毛の浜』・『夕方の稲毛海浜公園』では、写真がとてもきれいでした。敬愛大学は稲毛にありますが、現在対面授業は週2で、学校にあまり行けていないので稲毛・千葉はもちろん、学校周辺のこともよく知りません…。こんなにきれいな海があるのかと驚きました。今度行ってみたいです。『夕方の稲毛海浜公園』の「時々、海と夕日と富士山を見たくなる。」という文は、なんだか小説の一文にありそうだなと思いました。

Ｂ

新型コロナ危機の後の教育を読んでの感想は、学校教育は今まで無駄が本当に多かったのだなと感じた。全校生徒が一か所に集まり校長先生の話を聞く全校集会などは本当に無駄なのではないかと感じた。これからは学校教育も今までの伝統を変えていかなければならないと思う。リモートの遠隔授業になってよかったと思った点は、自分の好きなように学習ができるという点だ。格好は気にしなくてよいし、何かを食べながら配信された資料を読み自主学習をするといった環境は素晴らしいと感じた。しかしその一方で、実際に教室で仲間と会えるわけではないので、授業で困ったことが起きたときに身近で相談できる人がいないといった点が不便であった。この特殊な授業形態を経験したことで学校教育の在り方をもう一度深く考えるきっかけになったのは、この時代に大学生をやっていてよかったと思う点である。これからは教育の在り方の見直しや、デジタル化による問題なども深く考えていかなければならないということに共感した。

Ｃ

新型コロナ危機後の教育というブログを読んで今、自分にとって何が大切でどんな風に大切にしていかなければいけないのか、考えるきっかけになりました。確かに、自分が病気にかかった時心の中で死の恐怖というのは少なからず誰にでも存在するのだと思います。でも、病気が治るとそんな考えなんて忘れてしまうのです。自分もいつもそんな気がします。よく大切なものは失った後に気づくと言われますが今がまさにそのことを実感しているのではないかと思います。去年の今頃まさかこんな事になるなんて想像しても居ませんでした。当たり前のように冬休みが来て最後の高校生活を楽しみ友達とみんなで最高の卒業式を迎えると思っていました。

今の大学の授業では遠隔授業がほとんどですが初めは慣れないことが多く学校に行っていた方がよっぽど楽だと思っていました。でも、慣れてくるとこっちの方が効率よく学べることもたくさんあるのではないかと思いました。登下校にかかる時間を他の時間に切り替えることができるかもしれません。しかし、集中力という面では心の切り替えが難しいのだと思います。家というのは自分の安心できる場所でもあると思うのでそこで勉強の気分になるというのはまだ難しく感じます。このように良い面もあれば悪い面も少なからず出てくると思います。これらをどのようにして掛け合わせていくかというのはいま社会が進歩していく中でとても大切な事だと思います。

Ｄ

「友人の価値－レンタルフレンドから考える」を読んで一番感じたことは、「一人では生きていけない」ということだ。私は今まで友人がたくさんいる中で成長してきた。その分自分をわかってくれる友人がいることが当たり前になっていて、大学で友人のいないまっさらな状態からスタートすることがとても怖かった。しかし大学生生活も半年が過ぎ、課題の相談から始まり少しずつではあるがお互いのことを分かり合える友人もできてきた。オンラインの授業を受けていても友人がいるおかげでその授業に関しての不安もなくなったし、対面授業も意欲的に取り組めている。本当に私と話してくれた友人には感謝したいし、すごい縁だなと感じた。

また高校の時、部活動でパフォーマンスも仲間との関係もうまくいっていないときがあったが、その時も何とか生きていられたのはクラスの友人がともに頑張ってくれたり、話を聞いてくれたり、笑わせてくれたりしたからだと思っている。心の底からその友人たちには感謝していて、今までの人生で一番友人の素晴らしさを実感した。私は実体験から感じることができたので友人を大切にしようという気持ちは人一倍持っていると勝手に思っていたが、今回「レンタルフレンド」という存在を知ってその金額の凄さにも驚いたし、周りにたくさんの友人がいる私は幸せ者だなと改めて感じることができた。

そんな大事な友人に私も大事な友人だと思ってもらえるように恩返ししていきたいと強く思う。1時間で1万8千円もかかるようなら私はたくさんの友人に100万円じゃおさまりきれないくらいお世話になっている。その分私も感情労働というわけではないが尽くしていきたいと思った。私はなによりも友人がいないと生きていけないし、こんなに笑顔で過ごせている時間の3分の2くらいはきっと友人がいなかったら存在しなかった思い出になると思う。そんなことをかみしめて、これから先も私といてくれる友人を心の底から大事にしていきたいと思った。

Ｅ

「認知的不協和について」という記事に興味を持ち、読んでみた。例に出てきた「私→＋A、私→＋B、B→－A」という関係は私にも似たような経験がある。私の場合、この関係性に当てはめると私はBの立場だった。私と仲が良かったaさんにはもう一人とても仲良くしているbさんがいた。けれど、私はbさんと以前酷い言い争いをしたことがあったので、bさんのことが好きではなかった。けれど、その時は「aさんが仲良くしているのだから、私が知らないだけできっとｂさんも素晴らしい人なんだ。だから仲よくしよう。」と思うことにした。しかし、認知的不協和を解消しないまま気持ちを隠して関係を築こうとしても、強い不快感がいつまでも残り続けた。そして、その不快感に耐えられなくなった私はaさんともbさんとも距離を置くことにした。その選択はできるだけしたくないものだったが、当時小学生だった私にはそれ以外の方法は思いつかなかった。心の中にいつまでも引っ掛かっていたその出来事を今回この記事を読んだことで思い出し、改めて深く考えることができた。私は今回の記事を読んでも、また同じようなことが起きた時には誰とも関係を壊すことなく上手く気持ちや関係を収めたいと思ってしまう。それは不可能で幼稚な考えなのかもしれないが、こうしてまた考える機会ができたのだから、これからの生活の中で答えを見つけていきたい。

Ｆ

　「主体的・対話的」と聞くと難しく感じてしまうが、この記事を読んで自分が思っていたよりも身近にあるということを感じた。

　私は今年の敬愛フェスティバルで特別企画部署に所属していたが、様々な学年の人が多く集まるほど幹部や学年が上の人の意見が通り、形だけの「対話的」になってしまうと思っていた。しかし、Zoomのブレイクアウトルームの機能を使って全学年が均等になるようにグループを組み、何度も話し合いを重ねて部署として一つの案を出すことができた。普通の部署会なら、周りの空気を読んで先輩の意見を優先してしまったり、同学年同士で大した案が出なかったりするが、毎回異なる人と対等にやりとりができるのはリモートならではで、対話的でいいと思った。

　私も中高と吹奏楽部に所属していたが、中学生の時は全体のバランスを気にせず、楽譜に忠実に吹いて主体的な演奏をしていた。しかし高校生になって、ソロパートがある場合は周りに合わせるよりも、自分が引っ張っていくという気持ちで演奏することが大事だが、普段の演奏は周りの音を聞きながら合わせて演奏するということを学んだ。例えば、同じf (大きく)という記号でも、主旋律（メロディー）を吹いているときと伴奏を吹いているときの音量を変えたり、引き立たせようとしたりして対話的な演奏ができるようになった。

　授業で「主体的・対話的」というとやはり難しいが、このように身近なところから探していきたい。

私もレ・ミゼラブル好きで、特に「On My Own」が一番好きで、よく聞いている。ミュージカルも主役だけでなく、様々なパートの声を重ねたり、ダンスを組み合わせたりして一つの作品を作る。また、音響や照明などのスタッフ全員で一つのチームで、人数が多くなるほど難しいが、みんなの意見をうまく取り入れられる対話的な作品がみんなに愛される秘訣だと思う。